

『カリスタ』にみるニューマンのパーソナリズム

——その一考察（2）——

長 倉 禮 子

I 序章

1. はじめに
2. あらすじ
3. 物語の舞台設定、描写、構成等について

（以上前号掲載）

II カリスタの人物像とその人格形成

本稿では、まずカリスタの人物像の粗描をする。次に彼女の人格形成の基盤となっているものについて考察し、最後に彼女の人格は他の人格と出会うことによってどのような影響を受け、どのようにしてその統一と深化が行われていくのかの跡づけを試みる。同時に、以上の分析と考察を通して、ニューマンのパーソナリズムがこの作品にどのように現れているのかということにも光を当てていきたい。

1. カリスタの人物像

カリスタはすらっと背が高く、整った顔立ちをしており、天上的な美しさを身に帯び、高貴な雰囲気漂わせているギリシャ人の少女である。豊かな表情をした穏やかな声の持ち主で、立ち居振舞いも洗練されていて上品である。いかにも女性らしいが決して内気でも遠慮がちでもない。危急な状況下にあっても冷徹な知性と強い意志とで自己を所有することができ、その自己所有の静けさ⁽¹⁾が高貴さと相俟って威厳ある落ち着きとなり、彼女を魅力的な女性にしている。

カリスタは、自国については言うに及ばず、他の国々の歴史や歴史上の英雄や、さまざまな人物についてよく知っていると同時に、詩歌、散文、哲学思想などの該博な知識をもあわせ持っている。それだけではなく、竖琴を奏でながら聞く者の感情を掻き立てずにはおかないような優しい声で歌ったり、語りをしたり、更に即興劇の登場人物になり切って演じることもできる。人と自由に会話を交わし、自分の考えをはっきり述べ、議論したり、何かを教えることもできるが、また人の話に耳を傾け、必要な時には沈黙することも知っている。多少感情的で激しいところもあるが、感情に流されて自己を失うことは決してない。主客を混同することなく事態を客観視し、的確な判断を下して行動できる。今やしっかりと自我に目覚めた少女に成長しており、その美しい容姿には豊かな教養に育まれた内的な資質が溢れ出ていて彼女を一層美しくしている。こうした外観を見るかぎり、彼女は充実した青春の日々を楽しんでいるであろうと思われるのだが、実際はそれと裏腹で、すべてに倦怠感を覚えている。太陽の光が燦さんと降り注ぐ故国ギリシャへのノスタルジーもあるのだが、青春のもの愛さとも違い、光の見えない

苛立ちと漠然とした虚無感のようなものに襲われている。彼女の心には安らぎが無く、見捨てられている者だという思いに囚われていてまったく孤独な状態にいる。

2. カリスタの人格形成の基盤

カリスタが生まれ育ったギリシャの眩いばかりに明るい自然風土と、その豊かな精神的・文化的土壌は彼女の感性を育み、知性を高めていったことが語られているが、それ以上に彼女の人格形成の上で大きな影響を与えたのは、キリスト教徒だった乳母のカイオーニであったことが強調されている。家庭環境については何も語られていないが、幼児期から思春期にかけてのこの乳母との人間関係が、カリスタの人格形成の決定的基盤となっている。カイオーニはキリスト教徒の家庭に生まれたクリスチアンの奴隷であったが、その主人の死後カリスタのところへ乳母としてきた。彼女がカリスタにキリスト教について教えたという記述は無いが、⁽²⁾彼女はキリストのことを語る時はいつも顔を赤らめた⁽³⁾ということがカリスタの忘れ得ぬ思い出として心にいつまでも残っている。カイオーニは何かに満たされている人のようであり、その満たされた幸せが他の人に対する思いやりとなって溢れ出ている善意の人以外の何者でもなかった。⁽⁴⁾彼女は不機嫌になったり、怒りやすかったり、頑固であったりしたことがなく、どんなことに対しても、いつまでもくよくよと心を悩ませるようなことはなかった。若くして亡くなったが、彼女はカリスタの心にかつて出会ったどのような人とも違った人間であるという強烈な印象を刻みつけていた。

このように、カリスタの天性の資質という土壌に絶対的価値の種がカイオーニによって蒔かれ、それはギリシャ的知性と感性の養分を得て、彼女の中でやがて主体的自我へと成長していくのであるが、十八歳の青年期に達した今、彼女にはこれからの人格的発展を規定する一つの方向が既に確立しているのである。それは知・情・意を含む彼女の存在全体を限りなく充足し得るような別な存在もしくは対象へ向かう筈のものである。いうなれば、彼女の全存在を賭け得る完全なある位格的(personal)な愛の対象へ向かって彼女自身が主体的に成長していかざるを得ないような方向性⁽⁵⁾の確立が既に見られるのである。他方、彼女が何かを憧れるとか渴望するということとは別に、彼女の方からはそれを打ち消すことも、それから逃れることもできない自分とは別のある人格(person)からの語りかけのようなものが彼女の実存の深みにある。⁽⁶⁾こうした状況を内面に孕んでいるカリスタに、今もし、新しい何かの要因が働けば、彼女の人格は先に見たような方向に向かってすぐにでも成長を始めるばかりに整っているのである。

3. カリスタの人格的統一の深化

カリスタの人格は他の人格と出会うことによって統一され深められていく。カイオーニから受けた影響については既に見たので、ここではキリスト教徒のアジェリアスとカルタゴの司教シシリウスとの出会いによって彼女はどのように人格的な影響を受け、変化していくのかを分析し考察したい。

(1) アジェリアスとの出会い

アジェリアスがカリスタのもとへ花束を抱えてやって来て、自分の心を託したその花束を彼女に渡そうとする時、カリスタはその花にやがて萎れていくであろう自分の姿を目敏く見る。彼女はそれまでも自分の命の儚さを漠然とは感じていたが、この時一層ははっきりとそれを自覚するのである。

“Do you accept my flowers, Callista?” he asked. “Fair and fragrant, like myself, are they?” she made reply. “Give them to me.” She took them, and bent over them. “The blushing rose,” she said, gravely, “the stately lily, the royal carnation, the golden moly, the purple amaranth, the green bryon, the diosanthos, the sertula, the sweet modest saliuunca, fit emblems of Callista. Well, in a few hours they will have faded; yes, they will get more and more like her.” (p. 125-126)

カリスタにはアジェリ阿斯が差し出した花束は墓場に飾る花環のように思われる。しかし、花の中に自分の儚さを見ていながらも同時に、カイオーニの満ちたりた幸せを自分のものにしたいという憧れと、それを同じキリスト教徒であるアジェリ阿斯が与えてくれるのではないかという期待を持っている。

“And you are come, of course, to philosophize to me, and to put me in the way of dying like Chione,⁽⁷⁾” she made answer. “I implore your pardon. You are offering me flowers, it seems, not for a bridal wreath, but for a funeral urn.” (p. 127)

この言葉は、カリスタは花嫁として一時的に幸福に生きることには興味を覚えず、萎れていく自分の存在をあくまでも儚んでいると同時にどうしてもそれを超えられる生へと行きたいのだという切ないほどの憧れをも示している。彼女にはキリスト教徒とは花のように時と共に枯れ萎れて行くようなものではなく、時空を超えることができ、決して空しくなることの無い人達なのだという大いなる期待がある。しかしアジェリ阿斯はカリスタのこうした内面の深い渇きに到底思い及ばず、彼には相手を思い遣る心の余裕もない。彼自身満たされているどころか不安な魂を抱えていて、彼女との交際によって得ることのできた豊かさを思い、彼女から離れるならば以前経験していたような孤独な状態に逆戻りしてしまうのではないかと恐れているのである。彼はカリスタがキリスト教に帰依することを祈り確信しており、更に自分の良き伴侶となってくれることを切望して求愛に来たのである。彼は性急に言葉を継いで、カリスタが自分と同じ「主」を受け入れ、同じ信仰に生きて一緒に家庭を築いていくことの素晴らしさを語る。

“Is it wonderful,” said Agellius, “that the two wishes should have gone together in my heart ; and that while I trusted and prayed that you might have the same Master in heaven as I have myself, I also hoped you would have the same service, the same aims, the same home upon earth ?”⁽⁸⁾ (p. 127)

しかしアジェリ阿斯は自分の「主」のことを語っているが、二言目には自分のことを語っている。カリスタにはどうしてもこの両者を同時に愛することができるのかわからない。（“And you should speak one word for your Master and two for yourself ?” p. 127）カリスタにとって愛することは全人格を持って対象と関わることであって、心を二つに分けるようなことは到底考えられない。アジェリ阿斯は、「主」がカリスタの心の中で既に働きかけておられて、将来彼女はその「主」のためにどれ程多くのことをなし得るかと考えるようになり、従って彼女は自分の為にもどれ程大きな存在となり得るかが予感されるのだと言う。アジェリ阿斯は、二人は生まれ育った環境や習慣などを異にし、この「主」に関してはまだ一致はしていないが、他のどんな人との間にも経験したことのないような考え方、感じ方、判断などにおける一致を感じている。これは、二人の上に唯一の主がおられて、その御手が互いの魂に同じ考え方や感じ方を刻み込んで下さって、互いを互いのために似た者として創って下さったということではないか。だから、彼の上へカリスタの眼を注がせるその同じ誘因が、彼が主とする方への礼拝へと彼女を誘っているのではないかと結論づける。カリスタはアジェリ阿斯がこのように自分の「主」について語るのを聞いて憤然とする。これはアジェリ阿斯の勝手に自己中心的な理論づけであるとしか彼女には思われない。彼女はこれまである程度キリスト教について聞いているが、最も肝腎なことは自分には依然として隠されており、自分は知るに値しないものとさえ思っている。彼女がキリスト教徒のアジェリ阿斯に期待していたのは彼女の心の最も深い渇きを癒してくれるであろう「主」について聞けるであろうということであった。それなのにアジェリ阿斯は自分のことばかり語っていて肝腎な「主」について語ってくれず、その方について質問すればいつでも話題をそらしてしまうのではないか。

“Your Master ! who is your Master ? what know I of your Master ? what have you ever told me

of your Master? I suppose it is an esoteric doctrine which I am not worthy to know; but so it is, here you have been again and again, and talked freely of many things, yet I am in as much darkness about your Master as if I had never seen you. I know He died; I know too that Christians say He lives.⁽⁹⁾ In some fortunate island, I suppose; for, when I have asked, you have got rid of the subject as best you could. . . ." (pp. 128-129)

そればかりか彼が語るのは掟とか義務とかであり、旧約の作者やそれ以前のユダヤの人々のことなど周辺のことばかりである。カリスタは言葉を継いで言う。

"You have talked about your law and your various duties, and what you consider right, and what is forbidden, and of some of the old writers of your sect, and of the Jews before them; . . ." (p. 129)

彼女にとって本当の宗教は掟や義務の問題ではなく、愛による人格的な関わりである。⁽¹⁰⁾彼女は更に続けて" . . . but if, as you imply, my wants and aspirations are the same as yours, what have you done towards satisfying them? what have you done for that Master towards whom you now propose to lead me?" (ibid.)と言って、「主」を知るということは直ちにその方に仕えるという行動に移らなければならない筈だという疑問を投げかける。彼女にとって愛は他者に向かうもの、自己から出、自己を与え尽すこと、それが愛なのである。その点から見れば、アジェリアスが愛だと思いこんでいるのは、実はその立場が逆転し、自己を目的とする利己主義ではないのか。

" . . . No!" she continues, starting up, "you have watched those wants and aspirations for yourself, not for Him; you have taken interest in them, you have cherished them, as if you were the author, you the object of them. . ." (Ibid.)

アジェリアスは唯一の神を信じており、他の一切を退けると言う。それなのに今、その方の手の跡、影がカリスタの心と精神に印されていると言って、まるで自分を礼拝せんばかりである。これは一体どういうことか。彼の言う「主」とは一体何者なのか。カリスタはますます混乱してくる。アジェリアスはつまるところこの「主」を自分を語る手段として利用し、彼女が「主」と人格的に出会うのを妨げているのではないのか。

"You profess to believe in One True God, and to reject every other; and now you are implying that the Hand, the Shadow of God is on my mind and heart."⁽¹¹⁾ Who is this God? where? how? in what? O Agellius, you have stood in the way of Him, ready to speak for yourself, using Him as a means to an end." (Ibid.)

カリスタはキリスト教徒の間には不思議な共感のようなものが存在していて、時間と空間を超越し得る何かを持っており、人間本性をも乗り越えることのできる力さえ彼らには与えられているとこれまで考えて来た。それなのにアジェリアスはどうであろう。彼女の大きな期待に反して彼の求めていたのはカリスタであり、しかもそれはカリスタの為でも、ましてや神の為でもなく、自分自身の為なのだと彼女には感じられる。カリスタは激しい言葉で、彼自身が恵みを受けているとも感じず、自分が与えるものを何も持っていないから、この儚く萎れ行く野の草のようなカリスタの元へ来るのだと言う。

"Here is a man who, so far from feeling himself blest, thinks I can bless him! comes to me—me,

Callista, a herb of the field, a poor weed, exposed to every wind of heaven, and shrivelling before the fierce sun—to me he comes to repose his heart upon. But as for any blessedness he has to show me, why, since he does not feel any himself, no wonder he has none to give away. I thought a Christian was superior to time and place ; but all is hollow. Alas, alas, I am young in life to feel the force of that saying, with which sages go out of it, ‘Vanity and hollowness!’ Agellius, when I first heard you were a Christian, how my heart beat! I thought of her who was gone ; and at first I thought I saw her in you, as if there had been some magical sympathy between you and her ; and I hoped that from you I might have learned more of that strange strength which my nature needs, and which she told me she possessed. . . . ” (p. 130)

アジェリアスはカリスタの儚く移ろい行く美に憧れて彼女を求めて来たが、カリスタの心は遙かに深く確実なものに憧れ飢え渴いているのだ。それは自分の生も死も一切を賭して愛し得る何者かでもある。彼女は自分が露のように消えていく儚い存在であることを実感しているからこそ、生と死、時間と空間を超越し得るもの、永遠で絶対的であるもの、彼女を完全に所有し得るものが必要なのである。彼女はそれなくしては安らぐことができない。彼女には全てを捧げて愛し得る対象が必要であり、そのような対象だけが彼女を真に生かすことのできる命である。そしてそれは彼女に存在の意味を与え、彼女の知・情・意を限りなく充足し得るような対象で、彼女の全人格、全存在をあげて立ち向かえるような絶対的な存在でなければならない。このような対象を、カリスタの魂は溢れるばかりの情感を込めて恋い求めているのだ。なぜなら彼女にとって愛は命であり、命は愛なのだから。

“ . . . I had hoped there was something somewhere more than I could see ; but there is nothing. Here am I a living, breathing woman, with an overflowing heart, with keen affections, with a yearning after some object which may possess me. I cannot exist without something to rest upon. I cannot fall back upon that drear, forlorn state, which philosophers call wisdom, and moralists call virtue. I cannot enrol myself a votary of that cold Moon, whose arrows do but freeze me. I cannot sympathize in that majestic band of sisters whom Rome has placed under the tutelage of Vesta. I must have something to love ; love is my life. . . . ” (pp. 131-132)

カリスタはアジェリアスの中に、彼女に与え得るもの、満たし得るものを何も見出せない。自らのうちに何も持たないアジェリアスが彼女に何も与え得ないのは当然なのだと思う。

“ . . . *What* can you give me? There was one thing which I thought you *could* have given me, better than anything else ; but it is a shadow. You have nothing to give. You have thrown me back upon my dreary, dismal self, and the deep wounds of my memory. . . . Poor, poor Agellius! but it was not his fault, it could not be helped,” she continued, as if in thought ; “it could not be helped ; for if he had nothing to give, how could he give it? After all, he wanted something to love, just as I did ; and he could find nothing better than me. . . . ” (p. 132)

アジェリアスはカリスタの一途な態度に圧倒され、彼女が超地上的な愛へと真直ぐに進んでいく者であることを悟り、この時に至って彼女にはっきりと人格的な神の存在を語るのである。その神は人間の心の憧れを完全に満たし得る方であり、その方の愛は人間の愛よりも遙かに強いものだと話す。⁽¹²⁾アジェリアスのこうした説明がどの程度カリスタに理解されたか分らないが、アジェリアスが「主」について語る時、頬を染めたことを彼女は印象深く心に留めるのである。⁽¹³⁾そしてアジェリアスとの対話を通じて、自分の心の激しい渴望が地上に見えるものや衰え行く美しさではなく、それらを遙かに超え

た確実なるものへ向かっていることを再認識するのである。それは彼女に存在の意味を与え、彼女の知性と感情とを満たすと同時に、彼女が全人格を持って愛することのできる「人格的な対象」でなければならないということの更に深い自覚をもたらししたのである。⁽¹⁴⁾このように己れをよりよく知らされたことは、これからカリスタが人格的に成長していくための必須条件であるし、回心へと導かれる決定的条件となるのである。

(2) シシリアスとの出会い

危急な状況下において泰然自若としているシシリアスに接したカリスタは、何か大きな力に支配されてでもあるかのように腰を下ろし、自分の宿命と思いこんでいることを話し出す。

“... I am no Christian;” and, as if from an inexplicable overruling influence, she sat down again. “Not a Christian yet, you mean,” answered Caecilius. “A person must be born a Christian, sir,” she replied, “in order to take up the religion. It is a very beautiful idea, as far as I have heard anything about it; but one must suck it in with one’s mother’s milk.” (p. 214)

この言葉の中には、カリスタがそれまで聞いたり体験したりしてきたキリスト教は非常に美しい観念であって、彼女は確かにそれに惹かれてはいるのだが、宿命的に自分はキリスト教徒にはなれないだろうという諦めに似た気持ちと、何とかしてそれを乗り越えたいという強い望みとが混在している。カリスタは宗教や信仰の起源と発展ないし形成について通俗概念を持っており、キリスト教もその範囲を出ないものと考えているようで、それが彼女の宗教的宿命論とも言えるような諦観と繋っている。彼女は宗教というものはある少数の人々の心の中の特別な何かに訴えるところから始まり⁽¹⁵⁾それまで漠然としていた信条は次第に形が定まってきて人々の心を占有するようになっていくと考えている。人々はある呼びかけに応え、共通の影響を受けて集まり、相互の共感によって強められ、自分たちの回りにある外的な形を成していき、このようにして宗教というものが形成されていく。そして子孫は父祖の信仰を受け継いでいき、かつては少数の人々の考えでしかなかったものは次第に民族の宗教となっていくのだというのである。⁽¹⁶⁾これに対してシシリアスは、アフリカのキリスト教徒の例をあげ、彼らの多くは成人してから回心者であり、信仰を離れていく人々の多くは却って親から信仰を受け継いだ人々だと話す。カリスタは一般論にこだわっているかのようにシシリアスに問い続けるが、実は自分自身の主体性の確立を求めているのであり、心を開いて答えを待っている。彼女は人類は様々な精神的な様相を持ついわば層のようなものを成して、人はその層を決して出ることができないのと同様、自分もキリスト教を信じるものとはなれないのではないかと問う。⁽¹⁷⁾シシリアスは、今はキリスト教徒の中で最も深い確信と平穏な心を持っている人であっても、かつてはキリスト教を嫌悪し、キリスト教徒を軽蔑していたことがあったかもしれないと答える。

それまで一般論にこだわっていたように見えたカリスタは、初めてキリスト教について聞いた時から偏見を持たずに心を開いているのだが、どうしても信じることができないのだという個人的な困難さ⁽¹⁸⁾を次第に打ち明けるようになる。

“I never did any such thing,” cried Callista, “since the day I first heard of it. I am not its enemy, but I cannot believe in it. I am sure I never could; I never, never should be able. . . .” (p. 216)

彼女は、キリスト教は、それについて話したり、想像したりすることは可能で、考えとして理解することは別に困難ではなく、観念の中には存在し得るが、信仰者にはなり得ず、余りに美し過ぎて夢以外の何ものでもあり得ないように思えると言う。

“It seems too beautiful,” she said, “to be anything else than a dream. It is a thing to talk about, but when you come near its professors you see it is impossible. A most beautiful imagination, *that* is what it is. Most beautiful its precepts, as far as I have heard of them ; so beautiful, that in idea there is no difficulty. The mind runs along with them, as if it could accomplish them without an effort. . .” (p. 216)

ここで beautiful という言葉を何度も繰り返して、彼女のかなえられない望みに対する切ない程の憧れを表わしている。しかし彼女は、ギリシャ人がみな永遠の地獄(Tartarus)へ行ったしこれからも行くであろうなどという教えは信じられないと続けるのである。⁽¹⁹⁾これに対しシシリ阿斯は、一般論ではなく、カリスタという一個人が永遠の地獄へ行かねばならないという恐るべき運命など決して信じられないと言いたいのではないかと問いかけると、カリスタは‘はっ’として、話題を自分の問題へと転換するのである。

“Do you mean,” she said, in a calm tone, “that my place, after this life, is an everlasting Tartarus?” (p. 217)

シシリ阿斯は答える代わりに、カリスタに幸せであるかと問う。カリスタとの最初の出会いの時に直感的に感じた彼女の個人的な問題に、今や自然な対話を通じて到達したのである。カリスタは俯き、落ち着いた声ではっきりと「いいえ」と答える。自分の心をしっかりと見詰めての答えである。シシリ阿斯は、人間はそのような存在なのだからカリスタが自分の存在の問題を解決しない限り、例え何年生きようとも、心の重荷は大きくなっていくばかりであろう、と言う。

“God forbid !” exclaimed Caecilius, “but let me go on. Listen, my child. Be brave, and dare to look at things as they are. Every day adds to your burden. This is a law of your present being, somewhat more certain than the assertion which you just now so confidently made, the impossibility of your believing in that law. You cannot refuse to accept what is not an opinion, but a fact.”⁽²⁰⁾ I say this burden which I speak of is not simply a dogma of our creed, it is an undeniable fact of nature. You can not change it by wishing ; if you were to live on earth two hundred years, it would not be reversed, it would be more and more true. At the end of two hundred years you would be too miserable even for your worst enemy to rejoice in it.” (p. 217-218)

シシリ阿斯はカリスタの人格と向き合い、彼女に話しているが、同時に心の中では「主」なる人格と向き合っている。そしてカリスタはシシリ阿斯の人格の中に吸い込まれるようにして聞き入っており、ここにはこの三つの人格の靈妙な交わりがある。

Caecilius spoke, as if half in soliloquy or meditation, though he was looking towards Callista. The contrast between them was singular : he thus absorbed ; she too, utterly forgetful of self, but absorbed in him, and showing it by her eager eyes, her hushed breath, her anxious attitude. At last she said impatiently, “Father, you are speaking to yourself ; you dispise me.”

The Priest looked straight at her with an open, untroubled smile, and said, “Callista, do not doubt me, my poor child ; you are in my heart. I was praying for you shortly before you appeared. No ; but, in so serious a matter as attempting to save a soul, I like to speak to you in my Lord’s sight. I am speaking to you, indeed I am, my child ; but I am also pleading with you on His behalf, and before His throne.” (p. 218)

シシリアスはここに至って初めてはっきりと人間存在の本質を指摘し、事実を事実として直視するようカリスタを励ます。つまり、カリスタが持っている問題は、彼女自身の魂にかかわる問題であると同時に、人間存在の本質にかかわる問題なのである。それは彼女に特異な問題ではなく、人間というものが本質的にそういう存在であるということである。シシリアスは、人間存在の本質は何よりもまず「私」といえるものであり、その「私」は死んでもなお生き続ける「私」または「あなた」なのである。人間は永遠にこの「自己」から逃れられない存在である。⁽²¹⁾

“Suffer me,” he said, “I was saying that if you lived five hundred years on earth, you would but have a heavier load on you as time went on. But you will not live, you will die. Perhaps you will tell me that you will then cease to be. I don’t believe you think so. I may take for granted that you think with me, and with the multitude of men, that you will still live, that you will still be *you*. You will still be the same being, but deprived of those outward stays and reliefs and solaces, which, such as they are, you now enjoy. You will be yourself, shut up in yourself. I have heard that people go mad at length when placed in solitary confinement. If, then, on passing hence, you are cut off from what you had here, and have only the company of yourself, I think your burden will be, so far, greater, not less than it is now. . .” (p. 219)

シシリアスはこの大前提を設定した後、例を挙げながら一步步論を展開して行く。例えば会話をしたいのに会話をする事ができなかつたり、音楽が好きなのに演奏する楽器がなかつたり、知識に飢え渴いているのに学ぶべきものがなく、同情したいのに愛すべき人が誰もいないなどしたらどれほど惨めであろうか。つまり人間の心は何かの対象に向かっているのだが、それは満たされることのない空しいものとしたらどうだろうかと言うのである。それから更に一步進めて、自分は愛してはいないし、好きでもなく、その目的も理解できないような人々の間にいるとしたらどうであろうか。また、一人の全能なる神がおられるとする。しかしその方を嫌いで、考えることもいやで、何の興味も持てないとする。だが、その方しかおられなくて、その方から逃れられないとしたら、これ以上に酷いことがあるだろうか。そしてもしその状態が永遠に継続するとしたら、これ以上の苦しみがあるのだろうか。シシリアスはここから更に論を展開させ、カリスタの思考を次の段階へと導いていく。先ず第一に、魂はそこに安らぐことのできる外的な対象を必要とする。ところがこの目に見える地上を去った時、何もそのようなものについての見込みがなかったとすれば、そこで起こってくる飢え渴きや心の悩みは、炎のように人の心を突き刺すのではないだろうか。⁽²²⁾従って永遠のタルタロスがあるという概念は不合理ではないということに結論づけられる。そしてここからカリスタ自身の問題に移行していくのである。

シシリアスは、カリスタの心の中にある要求、望み、憧れなどは、皆ある対象を必要としているし、そのような対象の存在を示唆するもの^はと言う。そして、そのような渴きを癒し得るものが地上には何もないとしても、もしそのような対象の方からの語りかけであるメッセージがあつて、その方について教え、渴きを癒すと異口同音に言っている人々があるとするならば、それこそある客観的真理が存在する証拠であつて、そちらの方^はを向き、耳を傾けなければならないし、もしそのような方がおられるとするならば、信じられるようにとその方に願うべきではないのかと語る。⁽²³⁾カリスタはこれと同様なことをカイオーニからもアジェリアスからも聞いていたのだが、彼女には余りに神秘的で隠されていることとしか感じられなかった。しかし今、彼女は自分自身の心をはっきりと知らされ、自分の憧れを満たし得るというその対象を、命まで賭け得るというその愛について是非とも聞きたいのである。シシリアスは、それはカリスタの個人的な問題であると同時に、すべての人間に共通する問題であるとして、キリスト教徒の礼拝と愛の対象をはっきりと説明する。

“Every man is in that state which you confess of yourself. We have no love for Him who alone lasts. We love those things which do not last, but come to an end. Things being thus, He whom we ought to love has determined to win us back to Him. With this object He has come into His own world, in the form of one of us men.⁽²⁴⁾ And in that human form He opens His arms and woos us to return to Him, our Maker. This is our Worship, this is our Love, Callista.” (p. 221)

人間は誰も自分からは永遠の唯一の方への愛は持ち得ない。その方は私たちをお創りになった方であるから私たちは礼拝すべきであるが、愛によってお創りになったので、私たちも愛を持って応えることを望んでおられる。それゆえその方は、私たちを愛のために勝ち得ようと私たちと同じ人間の姿をとって、ご自分のものであるこの世に來られた。そしてご自分の腕を開いて、創り主であるその方に愛を返していくよう私たち皆に求愛なさっているのだと教える。⁽²⁵⁾ シシリアスは、今や単刀直入にキリスト教の愛であるアガペーの本質を語る。

“There is but one Lover of souls,” cried Caecilius, “and He loves each one of us, as though there were no one else to love. He died for each one of us, as if there were no one else to die for. He died on the shameful cross, ‘Amor meus crucifixus est.’⁽²⁶⁾ The love which he inspires lasts, for it is the love of the Unchangeable. It satisfies, for He is inexhaustible. The nearer we draw to Him, the more triumphantly does He enter into us; the longer He dwells in us, the more intimately have we possession of Him. It is an espousal for eternity. This is why it is so easy for us to die for our faith, at which the world marvels.” (p. 222)

永遠で変わることはない、唯一絶対の愛が存在する。その愛は私たちと同じ人間になって、十字架上に死ぬほど私たち一人一人に対する愛を証して下さった。もし私たちが心を開いて、「私」に対するその方の愛を受け入れるなら、私たちの心の中にその同じ愛が注がれて、私たちもその愛に与かり、その方と同じように死ぬほど愛することができるようになる。死は最高の犠牲であり、決して終わりではなく、愛する方との永遠の一致へと導くものである。⁽²⁷⁾ この創造主に近づいてはどうかとシシリアスはカリスタを誘う。カリスタは決して幸せではない。しかし、自分の国や民族から受け継いだもの、自分の運命を引き受けて生き、そして死ななければならないと思いこんでいる。

Callista seldom lost her self-possession; for a moment she lost it now; tears gushed from her eyes. “Impossible!” she said, “What, I? you do not know me, father!” She paused, and then resumed in a different tone, “No! *my* lot is one way, yours another. I am a child of Greece, and have no happiness but that, such as it is, which my own bright land, my own glorious race, give me. I may well be content, I may well be resigned, I may well be proud, if I possess *that* happiness. I must live and die where I have been born. I am a tree which will not bear transplanting. The Assyrians, the Jews, the Egyptians, have their own mystical teaching. They follow their happiness in their own way; mine is a different one. The pride of mind, the revel of the intellect, the voice and eyes of genius, and the fond beating heart, I cannot do without them. I cannot do without what you, Christian, call sin. Let me alone; such as nature made me I will be. I cannot change.” (pp. 222-223)

カリスタを支配しているこの悲劇的とも思える運命への諦めはシシリアスを圧倒するが、彼は自分自身のことを語り始める。シシリアスは、かつては誇り高く厳格なローマ人で、悪い習癖もあり、快楽を好み、文人であると同時に政治的な地位もあり、長い間の交友関係や複雑な人間関係もあった。そんな彼を変えてしまったのはシシリアス自身であったろうか。かつて彼の愛していたものを退ける力を勝ち

得たのは彼自身だったろうか。かつてしていたことや、自分が何者であったかさえ忘れさせた力は自分で得たものであったろうか。そうではなかった。滅びるより他はなかったシシリアスを変えさせ勝ち得たのは、唯一の、憐れみの方であり、私たちと共にいて下さる神の恵みであった。このようにシシリアスは、上から自由に与えられる恩寵の無償性を語るが、私たちの方からも自由な協力が必要であるとも言う。上からの恵みは、神の自由な意志により無償である。しかし、人間の自由をも否定するものではない。人間の方からも自由に望むこと、そして同意することが必要なのだ。⁽²⁸⁾シシリアスが自分自身のことを語った時、この誇り高く感じやすいギリシャ人の少女に、ある反応が起った。彼女は初めてシシリアスも自分と同じような弱い人間であることを知って共感を覚えたのだ。彼女がそれまで神とってきたものは地上的なもので、官能的でさえあり、尊敬することも信じることもできなかった。彼女は真理と愛、そして聖なるものに飢え渴いていた。それを彼女の宗教の中には見出せなかった。その宗教の指導者たちは低俗で、偽善的で、腐敗し切っていた。カリスタはシシリアスの中に、優しさと穏やかさが力強さと共存しているのを感じ取った。それは彼女がこれまで経験してきたものとは全く違った新しいもので、人間を超越するある聖なる、そして真実なる存在であった。それなのにシシリアスは、自分は普通の人間であり、罪人であると言っているのだ。⁽²⁹⁾カリスタは恩寵によって全く新しい人に変えられてしまった一人の人に会ったのである。

この段階ではまだカリスタの人格的成長の動きは見えない。しかしカリスタが自分の内面の状態を意識化したことは、彼女の人格的発展の方向を定める大切な契機となっている。しばらくしてその方向が明確に定まり、そこに向かって彼女の内面に変化が生じ始めるが、それまでの状態をニューマンは中間地帯(midway region of inquiry p. 317)と呼んでいる。

以上本稿で見えてきたことを纏めると、先ずカリスタの人格形成という心理学的な側面が挙げられる。カリスタは幼年期から青年期にかけてキリスト教徒のカイオーニの影響を受けて育った。既に自我と絶対的なものへの価値にしっかりと目覚めており、時空を超克し得る生への憧憬が彼女の裡で芽生え生長している。それと同時に、彼女は心の中で良心の声または人格的な語りかけのようなものを絶えず感じている。アジェリアスに求愛された時には、自分の心が唯一絶対的で超地上的な愛の対象に向かっていることを自覚し、そのような対象に全人格をもってかかわらざるを得ない方向性を悟る。シシリアスと出会って心の問題を打ち明ける機会が与えられ、彼との対話を通じて絶対的な対象に向かった主体的な生き方を求めている自己認識は深化される。こうした分析から、カリスタは生得的な傾向性と天賦の素質に加えて、反応に際して変化生成を可能にする能力を備えている人物であると言えよう。その人格形成の過程においては、自己を覚知し、自己批判を行い、彼女の中では自己高揚をつとめる個人化(individuation)が行われていて、未来に対する中核的な希求が、彼女の人格の方向性と統一化に大きな役割を果たしていることが認められる。⁽³⁰⁾

次に人格に関する哲学的・神学的な側面からは、次のような点が挙げられる。(1) 人間存在の本質は「私」と言える人格的な存在であって、人間は外的で人格的な対象を必要としている、(2) カイオーニ、アジェリアス、シシリアスらはみな人格的な神の存在を語ったが、その方は唯一絶対で永遠の愛なる神である、(3) 愛なる神は人間になってくださって(incarnatio)、人間を愛の交わりに招いておられるが、人間の側からは自由で主体的な、つまり人格的な応えが求められている、そして(4) カリスタはカイオーニ、アジェリアス、シシリアスらとの出会いによって人格的な影響を受けるが、それは彼らが神・キリストとの内的でパーソナルな交わりがあったからに他ならないなどである。カリスタは、これらの諸側面と主体的に出会い、次第に人格の統一を深めていき、その成長と完成へと導かれていくのである。

(1991年11月6日受理)

注

1. ギリシャ彫刻の静けさになぞらえて次のように描写している。“It was the calm of Greek sculpture; it imagined a soul nourished upon the visions of genius, and subdued and attuned by the power of a strong

will.” (p. 213)

2. アジェリ阿斯に対する言葉の中に“I know He died; I know too that Christians say He lives.” (p. 128)と、キリストの死と復活についてすでに何かを聞いていること、また他のところでは、「美しい理想」(p. 216)という言葉でキリスト教についてのある程度の知識を持っていることが暗示されているが、これらはカイオーニからかどうかは不明である。

3. “She could not speak of her Master without blushing for joy. . .” (p. 221)

またアジェリ阿斯も「主」について語る時に頬を染めたと述べている。(p. 134 注13参照)ブレモンは、ここはニューマン自身の宗教心の溢れから書かれたと言うことと、キリスト教徒と神との交わりの最も深い心情を表している非常に微妙かつ重大なところであると指摘し、次のように述べている。

In this place, for example, it would not have occurred to one who was merely a skilled writer, or, at least, he would never have dared, to transcribe so simply Callista's recollection: —My slave could not speak of her Master without blushing for joy, nor Agellius either.—As a sign of the love of God, a profane writer would try to find words or actions of a more striking nature. He would not think of looking for the most simple, the most instinctive, and the most intimate of the manifestations of human love, the quick, chaste, and timid colour which is its first avowal. Such an idea would never occur to any one who wanted to describe effectively the emotions of a Christian soul and this stroke of the pen is sufficient, it seems to me, to convince us that Newman is here speaking out of the fullness of heart, and is translating impressions which are not unfamiliar to him. (Bremond, op. cit., p. 247.)

ブレモンは、この「主」を語って頬を染めるアジェリ阿斯こそ本当のニューマンであるとも言っている。(Ibid., p. 326)

4. キリストとの深い人格的交わりを生きていたカイオーニの存在そのものがカリスタの人格形成の大きな要因になっていることを示している。
5. 愛や正義や人格価値の充実などが、人間の生や生活に方向性を与えると考えられるが、ニューマンは、人間は完全性や善に向って成長するものであり、その成長は精神的な行為によって達成される生きた成長(living growth)であると言う。(See: *A Grammar of Assent*, Chapt. 9. 1)
6. 「心の中の声」については後に詳しく考察する。(See: *Callista*, pp. 314-315)
7. カイオーニは死の少し前に見た夢のことをカリスタに話した。その夢の中で彼女は白い衣を纏い花の冠を冠った人々に迎えられ、彼らによって美しい婦人のもとへ導かれた。その婦人は彼女に自分の息子からであると言って、愛を表す赤いばら、純潔を表す白百合、墓にまき散らすための紫すみれ、そして墓の上に茂らせるための緑の棕櫚を渡したと言う。(p. 126)この婦人はマリアであり、その息子はイエスであると考えられる。
8. この言葉の中には、夫婦が共に同じ神を主と仰ぎ、共に礼拝しながらひとつの目的を持って生きていくキリスト教的家庭の理想が語られている。恋愛や結婚はエロースを契機とはするものの、いわゆるアガペーと言われる愛と対立するものではなく、両者は共に同じ神に由来するものであり、神に行くのに必ずしも妨げとはならない。アジェリ阿斯は唯一の主なる神を信じていたし、愛の対象を求め、理想的なキリスト教の家庭を築くことを夢見ていた。それ自体悪いものではなく、却って良いものでさえある。しかし、理想的な家庭生活であっても人を完全に満たし得るものではないし、神を忘れさせる危険性もある。ある人々は分かつた心で唯一の神に向かうため、その良いものをさえ犠牲にするのである。(See: Mt. 19: 11-12, IICor. 7: 32-34)
9. 注2参照。
10. アジェリ阿斯の信仰は、徳の実行とか掟の遵守とかいう道徳面が強調され、自力的であるのに対し、カリスタの態度は自分の弱さや憐れみを認めて上からの助けに飢え渴いている。またカリスタにとって愛は無条件に自分を与えることであり、アジェリ阿斯の態度は自己中心的に思われるのである。
11. “the Hand”というのは、カリスタの心と精神における神の働きであり、“the shadow of God”というのは、その中に神の姿が認められるということであろう。
12. アジェリ阿斯は神と競おうなどと言う考えは毛頭持っていないが、カリスタは人間の愛を通してではなく、直接に神へ向かうように運命づけられている者だということを悟って、自分から身を引くのである。以下にアジェリ阿斯の言葉を見よう。

“... One word will I say for myself; nay, not for myself, but for my Master. Do not for an instant suppose that what you thought of the Christian religion is not true. It reveals a present God, who satisfies

every affection of the heart, yet keeps it pure. I serve a Master," he continued, blushing from modesty and earnestness as he spoke, "I serve a Master whose love is stronger than created love. God help my inconsistency! but I never meant to love you as I love Him. You are destined for His love. I commit you to Him, your Lord, whom I never ought to have rivalled, for whom I ought simply to have pleaded. . . " (p. 134)

13. 注3参照。上記注12に... he continued, blushing from modesty and earnestness as he spoke, ... とある。

14. 第十二章だけを見れば「超地上的愛と地上的愛」の主題が展開しているようにも思われる。(前稿 I p. 39—40 参照) しかしニューマンは、この一見異なるかに思われる愛を決して対立するものとも序列あるものともしてはいない。アジェリ阿斯にも、純粋に神を愛し、神に仕えたい心があることは明らかであるし、カリスタに対する彼の愛は決して神への愛と矛盾するものではない。アジェリ阿斯はカリスタを神への愛と奉仕に導きたいと切望しているのであり、彼女の中にすでに神の恩寵の働きを見ており、恩寵が彼女において実を結ぶことをも予感しているのである。ニューマンは、ある人々は地上的愛(エロース)の媒介を通さないで直接天上的愛(アガペー)へ向かうように招かれているということを示そうとしているのではなからうか。ところでブレモンはカリスタとアジェリアスの両者にニューマン自身の姿を見て次のように言っている。

Callista, who does not understand that God and His creature can be loved at one and the same time, Agellius, who blushes as soon as he speaks of his Master, are both one and the same person—Newman himself in the transparent reality of his personal devotion to our Lord. (Bremond, op. cit., p. 250)

15. 原始人の心情に新しく初めて現れた「おそれ」の感情から宗教史の発展が始まるとオットー(Rudolf Otto)が言っている(*Das Heilige*, 1917 参照)のは周知の通りであるが、ニューマンは「良心」が人間の心を拘束する本質的な宗教原理であるとする。(See: 'The Influence of Natural and Revealed Religion Respectively', *University Sermons II*; *A Grammar of Assent*)

16. この考えは宗教を社会的文化現象とする見方と似ている。つまり、宗教の特質ないし発生を人間の情緒的経験のなかに見、宗教的価値体系は人間が環境的な社会の中で行う宗教的行動によって作られ、その価値体系が個人以外の社会的文化現象に伝えられ、その結果宗教的価値を持ったさまざまな社会的宗教現象が現れるのだという見方である。(岸本英夫『宗教学』、『世界の宗教』参照)

17. カリスタには宗教および信仰を社会的文化現象と考えている面もあって、自分はそこに生まれ育った民族宗教の枠外に出られないと思っている。しかし信仰というものは、人格構造の内部に形成されるものであり、あくまでも個人的、主体的な決断を伴うものである。

18. 信仰は個人の決断であるが、恵みが必要である。(Matthew 16: 17, John 6: 44)

19. Tartarus はギリシャ神話に出てくる地獄(Hades)の下の暗い底なし淵のことである。キリスト教には地獄の永遠性という考えはあるが、ギリシャ人が皆そこへ行かなければならないということはカリスタの聞き違いか誤解か思いこみであろう。

20. キリスト教は観念や思想ではなく歴史的事実であることをニューマンは強調しており、これが彼のパーソナリズムの基礎となっている。これについては後述する。

21. ここでは人格の本質が語られている。

22. 「私」から出発したシシリアスの話は、人格的存在である人間の心はそこへ向かっていくべき対象を必要とするところへ展開していく。この考えは『承認の原理』(*A Grammar of Assent*)に詳しい。(See: Chapt. 10:1)

23. 対象の方からすべての人間に語りかける客観的な真理が存在すると言うことであり、その語りかけ及び呼びかけに答えるのは、個人の信仰による人格的決断である。

24. John 1: 10—14

25. キリスト教の本質である受肉(Incarnatio)の主題に入っていく。

26. Our Lord was crucified.

27. ニューマンのパーソナリズムの中心をなすものである。

28. 恩寵の無償性、先行性、そして恩寵の優位、それと同時に人間の自由な意志による同意が語られている。

29. II Cor. 4: 7

30. G. W. Allport『人間の形成』豊沢登訳(理想社 1959)参照。注5 参照。